

ソーシャルアートとしての音楽の可能性

——音楽実践への参加過程と参加者の関係性の分析を通して——

横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育実践専攻 音楽領域
西山 颯

本研究は、近年広がりを見せる、社会問題の発見・解決と結びついたソーシャルアートと呼ばれる実践に着目し、音楽実践が社会的集団・文脈の上で新たな意味を生成する原理を明らかにすること、そして実践の適切さを評価するツールを提案することを目的とする。研究過程においては、「社会的相互行為」によって観客や聴衆も作品の生成過程へ参加していくというソーシャルアートの特徴を踏まえ、〈東京レインボープライド 2017 (以下、TRP)〉、〈アンサンブルズ東京〉という2つの音楽実践でエスノグラフィー調査を実施し、聴衆が実践へ参加する過程の分析を行った。

第1章では、ソーシャルアートに関する実践を参照しつつ、定義や対象の範囲についてのまとめを行ったのち、音楽が社会との関わりを持つ原理の先行研究として、中村の提唱する音楽の「語りなおし」を挙げた。中村はセクシュアル・マイノリティの音楽イベントを考察し、能動的な聴取による〈語り〉の結びつきが、実践に参加する人々の中で関係性の変容を促すとしている。しかし、「語りなおし」は主に聴取に焦点を当てていたことから、トゥリノによる「上演型」「参与型」という音楽形式の類型を援用し、実践の形式によって音楽への参加の度合いが変化する可能性を指摘した。

第2章では、セクシュアル・マイノリティの啓発イベントである〈TRP〉のステージ・プログラムで参与観察を行い、そのフィールドノーツを分析している。〈TRP〉では、クラシック音楽のコンサートに代表される「上演型」と聴衆も参加者となる「参与型」の音楽が、手拍子やコールアンドレスポンスなど、聴衆の「参加行動」によって連続的に揺れ動く様子が見られた。さらに、実践に参加するの参加者の様子から、音楽実践への参加過程が「上演型」から「参与型」へ移り変わる中で、「参与者」が参加の度合いを次第に強めていく構造、そして音楽実践への参加過程は社会集団への参加過程としても読むことができる可能性を示した。

第3章では、ソーシャルアートとしての「音楽の力」は構造的なものであり、ポリティクスとなり得る危険性を孕んでいることから、行われる実践の適切さを評価する必要性を指摘した。そこで、実践の場で目指される理念など、社会的な関係性を構築する場の「理念的枠組み」と、参加者とアーティストの協働を促進する「参加の枠組み」の2つの観点を実践の適切さを見定めるツールとして提案し、参加型の音楽の祭典を謳う〈アンサンブルズ東京〉でのフィールドノーツ、および半構造化インタビューの記録を分析した。〈アンサンブルズ東京〉では、参加するアーティストの「理念的枠組み」の解釈によって行われる実践の形式が様々である。さらに、実践の「参加の枠組み」と〈アンサンブルズ東京〉の「理念的枠組み」のズレによって参加者の体験にもばらつきが見られた。これらの考察から、2つの枠組みのツールとしての有効性を述べた。

以上を踏まえ、音楽実践が社会的集団・文脈の上で新たな意味を生成の原理を、音楽の生み出す参加の過程と社会集団への参加過程の重なりとして読むことで、「理念的枠組み」「参加の枠組み」の2つの観点でソーシャルアートとしての音楽実践を評価することができると結論付け、論を結んだ。